

浦安の投網師

URAYASU NO TOAMISI

～水に踊る漁師の技～



舞浜ホテル群をバックに広がる投網

浦安の投網師たちは、「細川流(すくい取り)」といわれる豪快な投げ方で、かつて多くの人々を魅了しました。船の上からパァっと広がるその網は、真夏の夜空に広がる花火を思わせるほどです。

浦安は、都心に近いということもあり、海水浴や釣り、潮干狩などの行楽客で賑わうまちでもありました。なかでも、漁師が投網の技を披露し、とれたての魚をその場で料理して食べさせるという独特の船遊びは、人気を博し、東京湾の夏の風物詩でもありました。

いつごろからこのような船遊びが行われていたのか明らかではありませんが、江戸時代の末には、涼み船や屋形船などかなりの遊船が隅田川や江戸川河口を賑わしていました。夏の暑さに涼みをとろうと、船に屋根をかけて川を上下するのがその始まりだといわれて



▲名所江戸百景
利根川ばらばら松(安藤広重)

いますが、いつしか船内で釣りや投網を漁師に行わせ、とれた魚をその場で味わうという遊びが行われるようになったそうです。

ちょうどそのころ、九州熊本からやってきた一人の

漁師が、新しい投げ方を江戸の漁師たちに教えました。彼は、江戸浜町にあった熊本藩細川家の下屋敷に身をよせていたことから、「細川の政」と呼ばれていました。

江戸の投網は、「土佐打ち(二つ取り)」という投げ方で一般的に行われていましたが、政は、熊本の投げ方である「すくい取り」という方法を伝えました。より大きい網を豪快に打てる「すくい取り」は、船で広い範囲を移動しながら打つのに適していたため、瞬く間に広まっていき、「細川流」と呼ばれるようになりました。



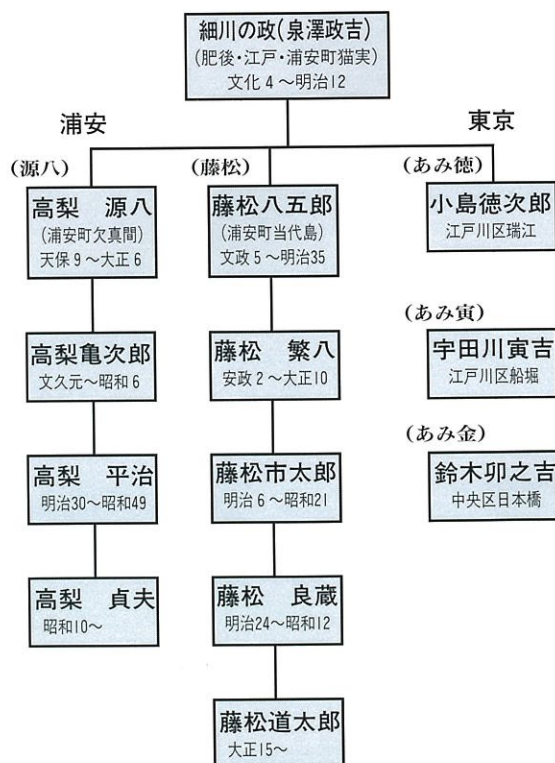
「細川の政」

から伝えられた技



▲細川の政は、猫実の花蔵院で眠っています。

明治に入ると、細川の政は浦安に移り住んで晩年を過ごしました。浦安の投網師たちにもこの投げ方を伝授しています。政に直接習ったという投網師の子孫たちが、今もこの技を伝えています。

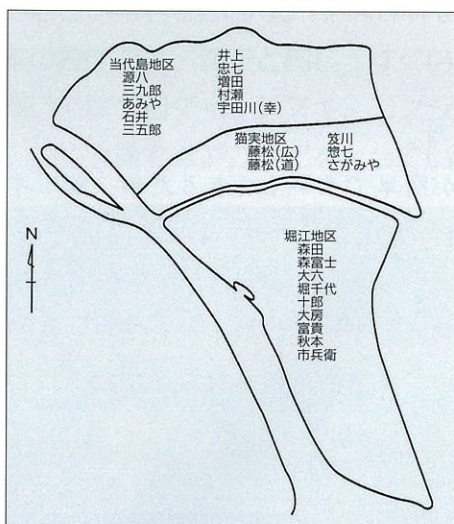


▲浦安では、高梨源八、藤松八五郎などが直接政の指導を受けました。

浦安の地先海面は、東京湾の最も奥部に位置しており、そこに広がる干潟により、人々はさまざまな自然の恵みをうけることができました。

釣りや潮干狩りなども、浦安の穏やかな海の恵みによってもたらされた人々の楽しみでした。都心から一時間ほどのところにあるため、東京方面からの行楽客はあつを絶たず、日曜や祭日ともなるとまちは一層活気づいたものです。

特に、大正8年に高橋（江東区）―浦安間を通船が往復するようになってからは、投網



▲昭和10年当時の浦安の投網師
(24名のうち23名が細川流を受け継いでいた)

船を楽しもうというお客もどんどん増えていきました。投網船（遊船）のより一層の振興を目的として、大正14年に12名の投網師により投網組合が結成されています。そして、ますます浦安の投網船は遊船業としての最盛期を迎えることになるのです。

投網師は、6～10人の客をのせて、舵子^{かじこ}（船を操作する人）とともに海へでていきます。船の船先から大きな投網を広げるその技は、「見ているだけでそれは気持ちがいいものだった」と人々を感嘆させました。とれた魚は、たちまちのうちに刺し身やあらゐ、天麩羅に料理され、人々の口へと運ばれました。海風を頬にうけながら味わう、その歓談のひとときは、多くの風流人を虜にしたといひます。

浦安の投網船



―いちばん盛んだったころの話を投網師たちに語ってもらいました！―

…一回何時間ぐらいかけていくの？…

源 八：「昔は、今とちがって朝っから晩まで。」

藤 松：「夜あみつたらよー、夕方6時ごろからいって、明け方までやってくんだよ。今みてえにねえ、9時ごろにあがるとかっていうじゃねえんだよ。一晩中やってんだよ。」

源 八：「朝いちばんの電車で帰ってくんだよ。」

堀千代：「夜中にでると乗物がなくてしょう。だから、半端な時間じゃ帰ってきらないんだよ。」

藤 松：「それだけ骨も折れたよねえ。」

…そんなに長い時間をかけて、お客さんは飽きちゃわないのかしら？…

源 八：「飽きねえだよ。」

藤 松：「夜中に天麩羅あげてよ、一寝りして、夜明けにまた網打って、それで帰ってくんだから。」

堀千代：「夜あみにくのはさあ、魚が欲しくってんだよ。夜のほうが、魚がいっぱいとれるんだから。」

源 八：「食べたほかに魚もって帰んだよ。それ楽しみにくんだから。」

…一晩で何回ぐらい網を打つの？…

堀千代：「打ちつきりだよ。30番ぐらい、多いときには40番ぐらい打ったんじゃねえの。」

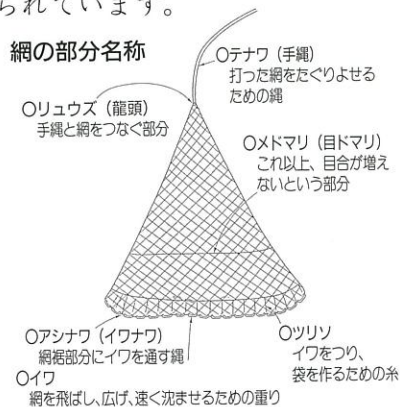
源 八：「びっくりなしだあ。昔は、なんでもかんでもとれた魚を料理して食べさせてしょ。だから、適当な魚がとれるまでやるわけよ。今は、市場で魚仕入れて持っていくから、とれねえったって、時間がくれば飯になんてしょ。」

堀千代：「昔は、持っていかなえんだから。」

藤 松：「昔は、とれるまで飯になんてねえ。だから、昼飯が4時になることもあんだから。お客も腹へっちゃうけど、船頭なんてなおさらだよねえ。」

投網の形

投網は円錐状の形をしており、網の下部（網裾）には、網が速く沈むよう、たくさんのイワ（重り）がつけられています。



投網の投げ方

投網の主な投げ方に、「二つ取り」と「すくい取り」があります。

二つ取りは、網を両手で二つに分けて投げる方法で、手取りが簡単で素早くできるため、陸（オカ）で移動しながら打つのに適しています。これは、四国の高知地方で完成されたといわれることから、「土佐打ち」とも呼ばれています。

また、すくい取りは、網を両手で一つに持って自分の右側に投げる方法で、熊本から伝わったといわれるため「細川流」「肥後流」とも呼ばれています。浦安をはじめ、東京内湾の舟打ち漁では、ほとんどがこの方法で投げられています。

細川流の投げ方は…



①手縄を束ねて持ち、その上に網を輪にして巻きます。



②手前10個程度の重りを一束にして左の肘にかけ、右手の指で網を5等分にします。



③後ろ向きに立ち構え、両手を前に出し、重りを左に移動させます。



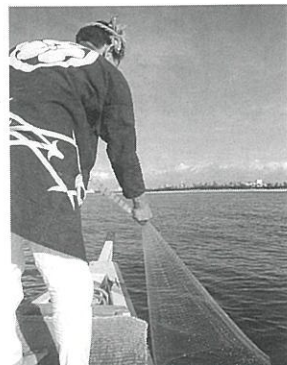
④返ってくる重りの反動を利用し、自分の右へカーブ投げます。



⑤網を放す瞬間です。



⑥網が着水します。



⑦網を引くときは、引いたり緩めたりして魚をつかまえます。

※ 視聴覚ライブラリーや郷土博物館のレファレンスには、これらをわかりやすくまとめた、ビデオが置いてあります。投げ方の違いなど、是非映像でご覧下さい。

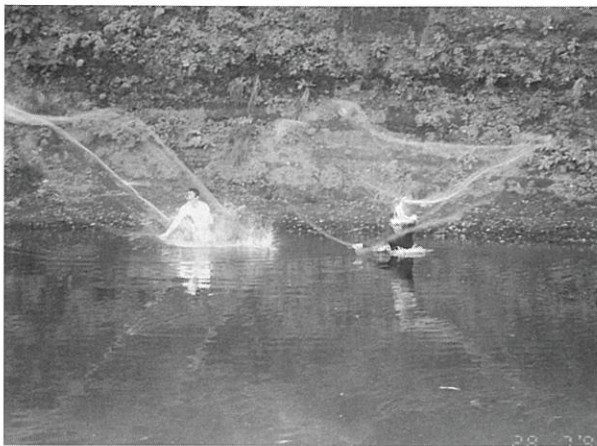
各地の投網漁

日本の各地で、様々な投網漁が行われています。ここでは、そのいくつかを紹介します。

● 熊本県の投網漁 ●

「細川の政」のふるさと、熊本県は有明海と不知火海という内湾に面し、古くから漁業が盛んな土地でした。かつては投網も盛んで、とくに球磨川河口に位置する八代市では、江戸時代、八代城主の松井氏が「舟出浮き」と呼ぶ舟遊びを好み、多くの投網師を抱えて、技術を向上させていたといわれています。

熊本の投げ方は、浦安と同じ「すくい取り」で、河口ではクロダイ、スズキ、コノシロ、ボラを、少し上流ではアユなどをとっています。



▲千葉県、養老溪谷にて



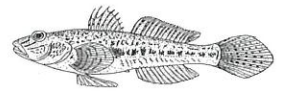
● 高知県の投網漁 ●

高知県を流れる四万十川は水量や生物に恵まれ、いろいろな漁法が行われています。

投網も古くから行われ、投げ方は現在最も投げられている「二つ取り」で、中流ではアユ、下流ではボラ、スズキ、クロダイなどをとっています。



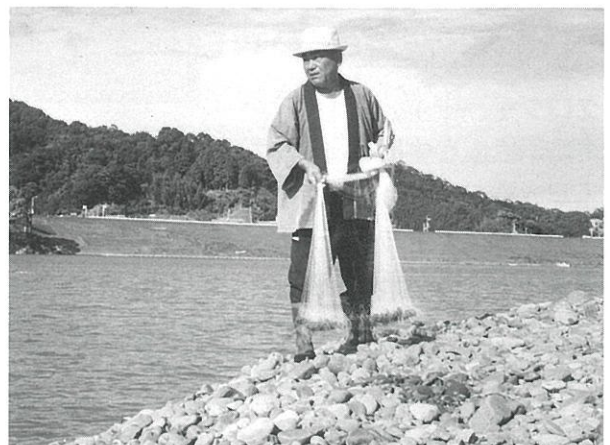
▲熊本県、球磨川河口にて



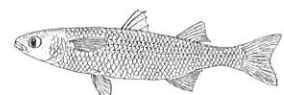
● 養老溪谷の投網漁 ●

千葉縣市原市の養老溪谷では、「二つ取り」の投げ方が行われていますが、少し変わったとり方をしています。

そこでは、投げた後、すぐに水中に飛び込んで、網と水底のすき間をふさぎ、岩の下に隠れているアユを追い込んでとります。これは、川底が平らでないために考えられた方法といえるでしょう。



▲高知県、四万十川にて



投網でとれる魚

高級魚

・スズキ

セイゴ→フッコ→スズキと成長に伴って名前が変わる「出世魚」である。

夏～秋、江戸川河口～浦安橋付近でとれた。

昔は食べた

・ボラ

外洋で生まれ、東京湾の奥の江戸川まで上ってくるこの魚は、出世魚としても馴染みのある魚である。現在では、臭くて食べられないというイメージが定着しているが、活きのよい刺し身を氷水でしめた“アライ”は絶品であった。

ボラの親戚

・メナダ

浦安では「トーボシ」とか「ボウズ」と呼ばれ、ボラに似ているが頭が平たく、大型ものは1mになる。卵巣からつくる「カラスミ」はボラのものよりも美味である。

内湾のタイ

・クロダイ

東京湾に広く生息し、幼魚は河口付近で成長する。3年で成熟するが、それまでは雄雌の区別がない。干潮のときにツブガイを潰してまき、目印に棒を立て潮が満ちてきたら網を打つ。

寿司ネタでお馴染み

・コノシロ

浦安では、小型のものを「ジャコ」「コハダ」と呼び、夏から秋にかけて「夜あみ」でとった。

別名は「ハヤ」

・ウグイ

「ハヤ」とも呼ばれ、1年間通して江戸川に生息する。河口にいる「マルタ」とは別種で、通常は海に下らない。

海に出るウグイ

・マルタ

ウグイの仲間である。河口や沿岸に生息し、卵からかえると一度海に下り、春に川を上って産卵する。

江戸前といったら

・マハゼ

投網よりも釣りの方が馴染み深い、河口の代表的な魚である。

美しい魚体

・シロギス

品の良さそうな白い魚体が特徴であり、梅雨時になると浅場に移動してくる。危険を感じると素早く、砂のなかに潜ってしまう。

幻の魚

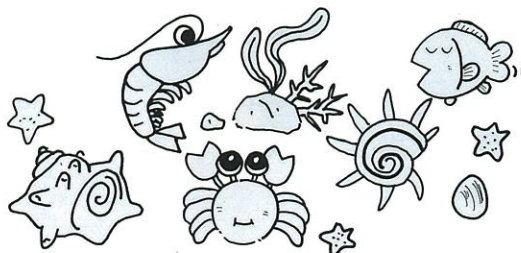
・アオギス

浅くてきれいな砂地に生息していたが、水の汚れと埋立てによりアオギスの姿は東京湾ではみられなくなった。かつて東京湾の風物詩であった「脚立釣り」は、船影などを嫌い、警戒心が強いアオギスの生態から考えだされた方法である。船から投げられる投網でとれたということは、アオギスが逃げられない程、網が広がったのであろう。

淡水魚の王様

・コイ

魚の中でも長生きであるコイは、川の投網の主役である。大きいものでは1mになるものもいるらしい。



投網よもやま話

珍しい魚がとれた！

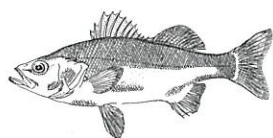
「マスがとれた」

“マス”といえば、山深い渓流をイメージするが、江戸川河口でとれたのは、「サクラマス」であろう。

サクラマスは「ヤマメ」の降海型で、川で1年半を過ごした後、海に下るが、約一年後に川に戻ってくる。

「深海魚が採れた」

“アンコウ”といえば深海魚の代表的イメージがある。深海魚が浅場に上がってくると「天変地異の前触れでは！」と思われがちだが、アンコウは生息する深さが幅広く30～120mといわれ、もちろん東京湾にも生息しているのでご安心を…



伝説の投網師

三代目「源八」“高梨平治”

昭和24年頃、皇居の堀で網を打ち、鯉を明治神宮に献上した。

体が大きく、浦安でも指折りの名人であった。

“藤松広吉”

どんなに強い風が吹いても、波が高くても網が打てる名人であった。

行徳の“網兼”（あみかね）

浦安の投網師ではないが、網の名人として有名であった。体が大きく力があり、向かい風でも網を打つことができた。

こんな投網もある！

「ヤグレアミ」

ヨシの根元が、波で崩れている所に魚が集まるので、太い糸で編んだ丈夫な網で、ヨシごと網をかぶして魚をとる。

「バカッピキ」

江戸川が増水して流れが速いときに行う。

網を打ち、その一部をカジコと二人で持つ。すると川底から船までカーテンのようになる。そのまま流れに乗り網を引く、魚がかかると持っていた網をはなして網に入れる。

底曳き網のような投網である。

「エサブチ」

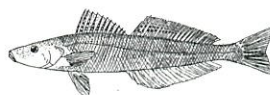
干潮のときに、ツブガイを潰してまき目印に棒を立てる。潮が満ちてきたら、目印めがけて網を打つ。クロダイをとるときに行う。

一生涯稽古だ／投網の修行

投網は「一生涯稽古だ」といわれるように、厳しい修行をつんで一人前になった。ある投網師は、船の上でも師匠に怒鳴られ殴られ、あるものは、夜にお寺の境内で練習したりもした。

最初は網など持たせてもらえず、船で使う「ズルボウキ」や水を入れたバケツにヒモを結んで振る練習をした。練習は時を選ばず、風呂屋の行き帰りも石鹼箱に日本手拭いを結わいて振る練習をした。

水面に開く豪快な技を習得し、腕を研ぎ続けるには、日常の鍛錬が必要であった。



“TO-AMI” (A traditional Net Casting in Japan)

Urayasu, a neighboring city to the capital Tokyo, offers a wide variety of enjoyable activities connected with its location on Tokyo Bay. The seashores, fishing, shell picking for example, are quite popular in the area. “TO-AMI” too, is a traditional net fishing style where fishermen throw their nets off the boats and, after retrieving the nets, they cook and serve their catch to the guests.

There are two “TO-AMI” fishing methods, the most popular method used in Urayasu is Called “Hosokawa Method”.

The history of this method goes back to the end of the Edo era, when a fisherman, “Masa” of the Hosokawa clan from Kumamoto city, Kyushu Island, introduced the practice. It is said that this style has been carried out through generations by the descendants of fishermen who were taught directly by “Masa” himself.



協力：浦安細川流投網保存会
〔浦安市指定無形文化財；技術保持団体〕
